

# 「がんばる」という言葉

## ——語義・用法、価値の変化——

播 磨 桂 子

### 要 旨

日常生活の中で多用される「がんばる」という言葉は、現在、励ましやプラス評価に用いられることが多いが、かつてはしばしばマイナスイメージを伴う語であったという。本稿では、「がんばる」の用法を分類し、その使用状況の推移について1920～1940年代の資料から採集した用例に基づいて分析を行う。またそれをもとにして、語源説を踏まえながら用法間の連続性を論じ、用法の推移と社会状況との関連について述べる。

キーワード：価値的意味の変化、用法間の連続性、社会と言葉

### (1) はじめに

人を励ますときの「がんばれ」「がんばってください」、自分の意思や目標を表明するときの「がんばります」など、現在「がんばる」は日常生活の中で頻繁に使用される語である。その一方で、つらい境遇にある人や精一杯やっている人に対して「がんばれ」ということの弊害がとらえられることがあるように、「がんばる」ということばを否定的にとらえる見解も近年よく見聞きするようになった。この語は江戸時代の文献にみられる「我に張る」、もしくは「眼張る」に由来するかと推測されているが、両者とも現代語の「がんばる」とは異なった意味で用いられている。また以前はあまりよい意味で使われていなかったという指摘<sup>(注1)</sup>もあり、感情的・評価的意味のプラス化、マイナス化の面でも興味深い。プラスの価値を持った用法は日清・日露戦争のころからよく使われるようになったという見解があり、社会的背景との関連がうかがえる。本稿では、明治期末から昭和初期を中心に「がんばる」の意味・用法を調査してその変遷について考察し、ことばの用法や価値の変化と社会の気分とを関連付ける研究の一端としたい。

### (2) 先行研究と語源説について

「がんばる」の意味変化についての論考として、新村出(1944)、顛原退蔵(1947)がある。

新村（1944）は『俚諺集覧』などの「我張る」「我に張る」を語源とする説をとり、安原貞室『片言』や近松門左衛門の戯曲などに見える「ガニハル」「ガヲハル」「ガハル」の例を挙げている。また「頑張る」については、自身の記憶とリアルタイムでの観察を通して、明治三十年前後の日清戦争の後に端を発し日露戦争の頃にかけて徐々に頻度を増し、大正年間に普及・頻出するようになったと述べているが、時代背景と結びついた語として捉えているのが興味深い。すなわち、「ガニハル」「ガヲハル」の「自分の主張を押しとおす」という態度が利己的なものとして捉えられマイナスイメージをもつ語であったのが、その主張の正当性により行為自体が是認されてくことでプラスイメージに転じ、対外的に主張を押し通す態度を是とする時勢に乗ってさかんに用いられるようになったという。

一方、顛原（1947）は18世紀半ごろから見られる「眼張る」の意味が現代語の「頑張る」とは異なっていることを示した上で、「眼張る」と「頑張る」のつながりの可能性を示唆している。顛原（1947）の取り上げた用例は<1>～<3>のようなものであり、「眼張る」は「目をつける、見張る、目を離さずに気をつけておく」といった意味を持って使われている。<sup>(注2)</sup>

<1> 此屋敷キへこつそりと理だ事もがんばつて置た、サア身受ケの金せうわい（宝暦七年、薩摩歌妓鑑、三）

<2> うかとせず往還のすきまを見、大道をがんばつてかな釘一本でも落て居る物を拾ふ（安永九年、根柄異軒之伝）

<3> 跡を付けたる追手の大勢、早くもまはって豊吉を乗たる駕籠の前と後 <sup>あと きまき</sup> <sup>きつき</sup>先刻から眼はって待くたびれた（天保八年、黄金の菊、二）

この「眼ばる」の意味用法に連続する例は明治時代に入ってからも見られる。

<4> 弥「そいつハ妙だがだれか見ちゃアぬねへかしらん 北「さいはひあたりに人もなし此間にはやく 弥「がんばれ＼／トあたりをきよろきよ見まはすに（西洋道中膝栗毛・四編上）

上記のような目を付けて見張ることを表す例は少ないものの、そこから派生した一所に踏みとどまることを表す用法はこの後も継続し、現代まで続く。

一方、明治期の大型国語辞書には「がんばる」を見出し語として次のような記載がある。いずれも「我を張る」の語釈であり、「眼張る」との関連には言及されていない。

<5> がんーばる 我張（自動四 我意を張り通す。頑固に主張す。頑張。

ぐわんーばる 頑張（自動四）がんばる（我張）に同じ。

（上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』1915 初版～1939 修訂版～1952 新装版）

<6> がんーばる 我張る・頑張る [動四自] 頑固にわが意を張りとほす。（俚語）

ぐわんーばる 頑張る [動四自] がんばる（我張る）に同じ。

（落合直文『日本大辞典 言泉』1921、1929 改修）

<7> ぐわんーばる（動）頑張 がんばるヲ 見ヨ。

がんーばる（自動四）頑張（我張るの音便、）我意を張るの口語。

（大槻文彦『大言海』1927）

語形の上からは「我に張る」から、「ふみはる [fumi haru]」⇒「ふんばる [fumbaru]」に類した「がにはる [gani haru]」⇒「がんばる [ganbaru]」を想定することに無理はないと思われる。しかし「我に張る」と「眼張る」との関連については使用例に用法の上で連続性を確認できないため、別系統としておく。

表記に関しては「眼張る」「我に張る」両語源説とも問題が残る。江戸期の「眼ばる」「眼張る」「がんばる」に対し、明治以降には「頑」の字を当てた「ぐわんばる」の表記が主流である。この時期には直音 [ga] と合拗音 [gwa] の区別が失われていたとみられ、「頑」の振りがなとして「がん」が当てられている例もある。すなわち発音上の語形が同じであるため意味の上から「頑」の字が当てられるようになったことが想定される。

新村（1944）は、漱石『吾輩は猫である』で九州出身の一書生（多々良三平）が使う「田舎言葉」として「頑固張る」という語句の例<8>を挙げたうえで、「頑張る」との歴史的連続性を否定している。「頑固」は明治期以降に例がみられる語であり、確かに語源としては考え難いが、「頑」が宛てられた経緯を考えるうえでは参考となるものと思われる。

なお、漱石には「頑固を張る」という語句の使用例もみられる。<9>は二人が言い争う場面で、「頑固を張って」と「我を折った」が対で用いられていることから、意味用法上「我に（を）張る」と「頑張る」の関連を考える上で着目される。

<8> 「そげん頑固張りなさるなら已を得ません。あなたはどうぞ来てくれますか」（夏目漱石『吾輩は猫である』下・十一）

<9> 所が毎日毎晩一つ鍋のものを突ついて進行しているうちに、何かの拍子だったが、いや己

は博士ぢやないよと急に橋本が云ひ出した。其時はいくら本人が証明したつて成程と云ふ気になれない位驚いた。第一、十年近くも大学の教授をしてゐる男を、博士にしない法はないと考へてる上、何うしても新聞で其授与式を拝見したとしか思はれないんだから、余も出来る丈は抗弁したが、矢つ張り博士ぢやないと頑固<sup>くわんこ</sup>を張<sup>は</sup>つて云ふ事を聞かない。余も已を得ず、さうかと云つて我を折つた。(夏目漱石「満韓ところどころ四十一」)

以上述べてきたとおり、「頑張る」の表記については「がんばる」の語史においてカギとなりうる問題であるが、資料の上でその経緯は未確認であるため引き続き調査をする必要がある。

### (3) 「頑張る」の意味用法間の関係

現在における「頑張る」ということばに対する認識に関する論考に川岸(2011)がある。川岸(2011)では、現在の「頑張る」が下記二つの意味要素を持つとして、(a)「行動」の意味要素について<活発/不活発>、(b)「心理」の意味要素について<快/不快>の基準をとり、「頑張る」の意味構造を「<活発>と<不快>」と位置付けた上で、励ましの言葉としてプラスの認識をされる反面、違和感を持たれたり禁句とされたりする状況を分析している。

- a) 自分の持てる力を存分に発揮し、目標達成のために活動する。
- b) 困難に対してじっと耐えて容易には諦めず、それを継続させる。

また、語源に関しては、「我に張る」「眼張る」の二説を挙げた上で、日本各地の「頑張る」方言形が、「-張る」の前部要素として「我」に類する形態素を持つことから「我・張る」説をとっている。

江戸期の資料から「我に張る」「眼張る」と「頑張る」を確定することは困難であり、他の手段で推測するしかないが、本稿では「頑張る」の用法に変化があったとされる1920～1940年代の使用例を調査することでその意味用法への考察を深めたい。

神戸大学附属図書館「デジタル版新聞記事文庫」は、神戸大学経済経営研究所により1911年から1970年にわたって作成された新聞切抜資料のうち、1945年までの資料の一部を電子化したものである。キーワードによる検索と画像による本文閲覧が可能であり、「がんばる」の普及時期と想定される年代に相当することから、本資料を用いて分析を行い分野の偏りなどを他の文献の例の検討により補う。

用法の分類については、小泉保編『日本語基本動詞用法辞典』(1989, 大修館書店)を参考

に<sup>(注3)</sup>、語義をA [場所] B [主張] C [努力] に分け、文型(述語がとる格のパターンと比喩的転用の段階および述語形式の機能により次のように下位項目をたてる。

A [場所]

- A 1 ある場所にとどまる(「見張る」行為を目的とする)。
- A 2 ある場所にとどまる。(同一カ所での「所在」を維持・継続する。)
- A 3 ある立場(抽象化された場所)に踏みとどまる。

B [主張]

- B 1 自らの発言内容として主張する。
- B 2 自らの主張を変えたり取り下げたりせずに保持する。
- B 3 自らの領域・威力を他へ及ぼそうとする。

C [努力]

- C 1 目標に向けて力を尽くす。(叙述の形)
- C 2 目標に向けて力を尽くす。(意志・意向の形、命令・依頼や願望の形)

次の< 10 >はA、< 11 >はB、< 12 >はCの例である。Aは「台所の真ん中に」のように場所の表示に二格・デ格の名詞句を取ることが多く、一つの分類基準とする。Bは「おれが神経病じゃない、世の中のやつが神経病だ」が主張内容として「ト」で引用されるパターンが特徴的であるため、これを一項目とした。CはA、Bと判別が難しい場合がある。例えば< 12 >では、目標「その一だけのために」と努力を向ける行為「生きてい(る)」が示されていることを分類基準としている。

< 10 > 吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駆け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に頑張<sup>ぐわんぱ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>ると三方面共少々宛騒ぎ立てる。(吾輩は猫である五 1905)

< 11 > 所が主人の自信はえらいもので、おれが神経病ぢゃない、世の中の奴が神経病だと頑張<sup>ぐわんぱ</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る。(吾輩は猫である七 1905)

< 12 > その一だけのために僕たちは頑張<sup>ぐわんぱ</sup>つて生きていなければならないのだ。こうしてそれが立派にプラスの生活だ。(太宰治・葉 1934)

Aの「ある場所にとどまる」意を示す用法には、少数ではあるが「見張る」行為を伴う例もあり、江戸期の「眼張る」に連続する意味・用法であると思われる。「見張る」という行為を

含む例をA 1、その場で行う他の行為を含意せず、単にある場所を占める、動かずに留まる意を表す例をA 2とした。A 2では、建造物や自然地形のような無生物を主格として取る例もある。また、A 1およびA 2では実際の空間上の場所を二格、デ格にとるが、この「場所」が抽象化され「立場」にとどまる意として用いられるものをA 3とする。以下に採集した例をあげて分析を行う。(註4)

A 1 目をつけておく。見張る。

< 13 > 斯ういう場所であるから斯漁場には夫々嚴重な見張り船が頑張<sup>ぐわんぱ</sup>ってゐて仲間以外のものは寄せ附けない(大阪朝日新聞 1919.5.14)

< 14 > 交番の数をふやして沢山の巡査を頑張<sup>ぐわんぱ</sup>らせて置けば泥棒がなくなるといふ筆法で、六法全書一点張りの役人の考へつきそうな議論だ。(大阪毎日新聞 1926.6.16)

< 15 > 禁制品の密輸入出に対しては、水上署が頑張<sup>ぐわんぱ</sup>ってゐるのだからそれで好いではないか(満州日報 1933.9.20)

< 16 > そのトンネルや鉄橋の両端にはまた、例の銃眼つきの櫓を築いて、日本の守備隊が頑張<sup>ぐわんぱ</sup>っているのだ(中外商業新報 1931.9.16-9.23)

< 17 > は、「監視」つまり見張るために議会に場を占めるのであるが、「見張る」行為については「監視する」と別の動詞で表現されるため、「頑張<sup>ぐわんぱ</sup>って」は単に場所を占める意であると解される。

< 17 > われわれは議会の会期中頑張<sup>ぐわんぱ</sup>って農民の立場から議会を監視する(東京日日新聞 1932.8.25)

< 18 > しかして罷業者側は各家畜集散市場の入口に頑張<sup>ぐわんぱ</sup>って罷業破りを見張り(大阪朝日新聞 1933.11.30)

A 2の用例では、無生物を主格とする例であっても< 19 >に「儼然」と描写されるように「動かしがたさ」という意味特徴があり、< 21 >のように他の通行・侵入をはばむものとして現れることが多い。

< 19 > 関門海峡を辿って瀬戸内海を外側に出ると其処から程遠からぬ九州の八幡には東洋無比の官設製鉄所が儼然<sup>ぐわんは</sup>頑張<sup>は</sup>つて居る（東京朝日新聞 1912.9.25）

< 20 > 北行した者は無人の境を行くが如く目的を達したが南方には当時国運隆々たる支那が頑張<sup>ぐわんは</sup>つて居る（京都日出新聞 1921.6.10-6.16）

< 21 > 普選熱が衰えて来たことは、勿論喜ぶべきことではない。彼等の中には、政友会が今日の如くに議会で頑張<sup>ぐわんは</sup>つて居る以上、微々たる野党の力を以てしては、到底普選案通過の望なきを悟った者もあるであろう。（東京日日新聞 1921.1.13）

A 3 ある立場（抽象化された場所）に踏みとどまる。ある状態を維持する。

< 23 > 蓋し全国農民の大部分は中農以下の小作農に属して収穫すれば直に売放つものなるに殊に被害の常として高き時代は頑張<sup>ぐわんは</sup>りて安値を突込みて売るのが習慣あり（東京朝日新聞 1913.12.29-12.31）

< 24 > 今年も丁度半分を過ぎた今日正月から商業会議所が調べた市内小売物価表を繰って見ると主なものは揃いも揃って頑張<sup>ぐわんは</sup>つて居る お正月に上赤百匁八十五銭した味噌、一升一円十銭した醤油、一斤六銭六厘の再製塩、牛肉ロース百匁の一円六十銭、沢庵練馬百匁の十五銭、馬鈴薯百匁の四銭など皆んなお盆が近づいて来た今日まで一厘も安くなってはいない（報知新聞 1922.6.24）

< 25 > 印度政府が綿布関税七割五分に引上げて、錫蘭嶋は一割、カッチ嶋は八分の関税で頑張<sup>ぐわんは</sup>つて居って印度政府は何うすることも出来ないという愉快な国柄で従って物価は安い（大阪毎日新聞 1933.8.11）

## B 主張

B [主張] は自説や自らの立場を強く主張する意を示す用法であり、意味的に「我（に）張る」と連続性がある。主張内容が引用のト格で示されるものをB 1、引用の形ではないが何らかのはっきりした主張内容があるものをB 2とした。また、自らの領域や威力を他へ及ぼそうとする用法について、この「主張」の意からの用法拡大とみなしB 3とした。このB 3の意味はA 3に接近するが、A 3が他から干渉を受けても屈せず立場を保持する意であるのに対し、B 3は他へ力を及ぼそうとする意をもつものである。

< 26 >は主張の内容が引用の形で示され、ト格を補語としてとる B 1 の例である。

< 26 >中には九十円台から百円台の相場を夢みて九十円以下では売らぬと頑張<sup>ぐわんぱ</sup>って居る株主もあるけれども此等は論外である（大阪毎日新聞 1916.9.22）

B 2 に含めた例の中には< 27 >のようにヲ格をとる場合があり、これについては B 1 とほぼ同じ意味用法である。< 29 >のように主張内容というよりは主張する立場にまで拡大されていると解される例では、主張をしつづける「維持」の意味合いが強くなり A 3 用法に接近する。

< 27 >自己を捨てて公共事業に尽すの念に欠け事毎に自己の主張を頑張<sup>ぐわんぱ</sup>り利己主義に陥るの弊あるが為めにして即ち島国根性を去らざるが故なり。（大阪新聞 1919.1.12）

< 28 >今こそ日本側の意見の宣伝時機であって、各国の意見定まった後からでは、日本だけが如何に頑張ろうとも、多勢に無勢の恨みなきを得ないであろう。（大阪朝日新聞 1923.4.12）

< 29 >日本側が関税会議で二分五厘附加税の主張を突張らねばならぬ別の大きな理由で、日本側はこの二分五厘の税率問題で会議が纏まらぬことになっても関わぬという意気込みで焦慮らずに頑張<sup>ぐわんぱ</sup>る模様だ。（大阪朝日新聞 1926.2.4-2.6）

< 30 >の「頑張り合う」は、現在ふつうに用いられる語であれば「張り合う」に相当しよう。B 3 「自らの領域・威力を他へ及ぼそうとする」の例である。

< 30 >またこれは資本のことをいうたのでありますが、今度は能力の上においても電力会社とか、砂糖会社とか多くの大きな会社がお互いに頑張り合つてゐる、これが統一されれば能力は何分の一かで足りる（大阪朝日新聞 1931.6.3-6.14）

< 31 >一時に一羽以上同じ産卵器に入ると普通の鶏でも多少は生み具合が悪いものだ。鶏の中には、故意に自分だけ頑張<sup>ぐわんぱ</sup>つて他の鶏を追い出してしまうものがある。（国民新聞 1931.6.10-14）

## C [努力]

A、Bが場所・立場や主張の保持であるのに対し、Cは目標に向けて力を尽くす＝何らかの行動をとる意であり、時間的には未来に向けられるものである。〈32〉では、「目的を定めて隠忍自重し仕事もやった」に該当するのが「頑張る」ことであり、ここでの目標は「国防も国力の充実も出来」ることである。また、〈33〉のように「頑張って」の形で副詞的にかかっていく部分に目標あるいは目標に向けての具体的な行動が示されることがある。〈34〉では、Aの意味に近い「踏み留まる」が「頑張る」と並列されていることから、Aの意味を離れて[努力]の意で用いられていることがうかがえる。

〈32〉明治時代の人をよく目的を定めて隠忍自重し仕事もやったが大正時代の人には口と共にやるだけの腹の力が欠けている、そこの処をウンと頑張らなければ何時までたっても国防も国力の充実も出来たものではないじゃないか（東京朝日新聞 1924.9.10）

〈33〉綿製品相場低落し英米等においては操短が行われて居るから我国もこの際操短をしたいという議論を聞くが本邦紡績業の今日あるはそうした場合に持ちこたえて来たがためであるから大いに頑張つて海外の市場を維持乃至は拡張することが必要であつて決してそんな消極的な策をとってはならない（大阪毎日新聞 1926.11.16）

〈34〉甘濃 勿論不況ではありますが紡績方面の影響がなく、まア自然増加ですな在留法人の景気はよくなくとも踏み留まって頑張つてゐるのです（大阪朝日新聞 1936.2.16）

なお、〈35〉はA 3に分類したものであるが、波線部「努力」に置き換えられる行為でもあり、連続性のある例である。

〈35〉この不況続きに今日まで頑張り通して来た銀行当事者の苦心も一通りでない、殊に各支店共整理の犠牲によって極度に大整理を行っている結果、行員等も減員しているので目下の行員の努力は実に敬服する程緊張して本店主腦者の意を持して活動している（台湾日日新報 19297.20-9.4）

C [努力] の用法で特徴的なのは、「頑張ろう」「頑張るつもりだ」のような意志・意向の表現、「頑張れ」「頑張ってください」のような命令・依頼の形である。これらは「がんばる」ことが望ましいことであるというプラスの価値を持って用いられていることの指標となりうる。また、波線部のように「大いに」「ウンと」といった程度大を表す副詞を伴うことも、努力という程度性を有する意味を持つことと関わっていよう。<sup>(注5)</sup> 今回の調査では、意志・意向・命

令・依頼のような働きかけを行う C 2 の使用例は 1930 年代以降に出現し、1935 年頃から数が急増している。

< 36 > 平野参謀長は記者室に顔を覗かし「いよいよ出動だよ、中国健児の意気を示すのだから諸君も大いに頑張つて欲しい」と欣然としてかたり（神戸又新日報 1931.12.18）

< 37 > 日本との衝突は到底回避し難く遼寧、熱河、黒竜江各省の司令官を招集し大いに貴下を応援するからそちらでも極力頑張れ（大阪毎日新聞 1931.12.25）

< 38 > 大日本柑橘生産組合連合会が、産業組合に加入する決意をしましたが、配当量の分配問題にも明瞭に看取される様に、余りに薄弱な組合でありますから、中央会としては、自身の柑橘生産組合を構成すると共に、未加入の組合を急速に吸集して強力な生産者組合をつくりますが、この運動の成功如何は、今後の計画たる胡桃の輸出にも影響しますから、大いに頑張る積りです（国民新聞 1934.3.22）

#### (4) 語源説との関連と意味用法の連続性

「頑張る」の意味用法を分類・検討してきたが、ここで「頑張る」の各意味用法と「眼張る」「我（に）張る」の連続性について考察したい。

「眼張る」の「じっと見張る」行為は A 1 に観察されるとおり、その場にじっと居続けることと近接性を持つ。ここから A 2 の「見張る」行為を含まずその場に居続けることへ、意味が拡大したと考えられる。さらに、状況上の類似性からい続ける<場所>が抽象的なく立場>へと転用され A 3 の用法を派生する。

「眼張る」<見張る>

⇒行動上の近接性⇒A 1 「<見張る>ために一所に動かずに居続ける」

⇒意味の拡大（使用条件の脱落）⇒A 2 「一所に動かずに居続ける」

⇒状況上の類似性⇒A 3 「ある立場（状況）にふみとどまる」

次に、「我（に）張る」の「我が意を張り通す」から具体的な言語行為を含む B 1 への連続性を考える。この行為は他との対立を生じるものであり、対抗する力に抵抗して主張を通そうとする行為をつづける（B 2）ことから、B 3 「威力を他へ及ぼす」意を持った用法につながる。

「我（に）張る」<我が意を張り通す>

⇒B 1 「具体的な意見を主張する」

⇒継続性の含意⇒B 2「主張をつづける」

⇒状況上の類似性⇒B 3「威力を他へ及ぼす」

A 3の「立場に踏みとどまる」意はB 2に接近し、A 2の継続性はB 2の継続性に通じる。そして自らの立場や主張を維持するために何らかの抵抗する力を要することが、Cの意味用法につながると考える。

A 3 ≒ B 2, A 2 = B 2 ⇒ C 1・C 2

この時期の「頑張る」使用例の意味用法間の関係から、「頑張る」には「眼張る」「我（に）張る」両方の意味用法が流れ込んでおり、それぞれの派生した意味用法が接近して、現在もとても多く用いられている努力する意を表す用法になったと考える。

次にいくつか、用例上にみられる連続性について述べたい。

< 39 > ~ < 41 > は、一所にとどまって動かない意味（A 2）の例であるが、その場所を動かないことが主張を続けることと一致している。座り込みのように「動かない」という行動を通して主張を続ける場合では、A [場所] の用法とB [主張] の用法に重なりが生じ、両方にまたがる例といえるのである。

< 39 > 何分にも七千余の職工が一団となって滅首された職工の復職を求め会社の返答なき限り一寸も動かぬと頑張つて動かないので事態は益々紛糾したが職工側に於ても治安を紊乱する様な事があっては世間の誤解を招くからとて自ら保安隊を組織して秩序の維持に努めた（神戸又新日報 1924.4.26-1924.4.30）

< 40 > 一方残留者の百余名は代表者の帰るまでは動かぬと頑張つて居るのでやむなく太田かんそう場に宿泊せしめ巡査の保護の下に一夜を明かし、炊だしをして与えた（大阪毎日新聞 1926.9.24）

< 41 > 「地つづきの隣が一坪千八百円、わしの土地が坪千百円とはあんまり殺生や！」というので大阪市庁の吏員のお百度まいりを鼻の先であしらい「ここ一寸でも動くものか」と頑張り出したおつさんがゐる（大阪毎日新聞 1935.9.12）

< 42 > < 43 > は「一所に留まり動かない」ことが「主張を続ける」意の比喩表現として用

いられている例である。

< 42 >元締口米国は元利揃えて返して呉れと少しも同情が無く、賠償金を取立てようとすれば肝腎の独逸は梃でも動かぬ頑張り様、間に挟まれた英仏伊白は右に行き左に行き取付く島もないと云うのが目下の状態である。(東京朝日新聞 1923.7.30-8.1)

< 43 >労役家畜としての適否に関して軌車及び或種の耕作用には抜群なるが如し実際局の各農場監督人の若干数は役牛として従来の牛を廃めて全部オンゴール種を以てせられんを要求し此種は定時間内他種の役牛よりも工程大なりとせり、併し或場合には印度牛は服役間往往思う通りに動かぬ所謂スネル。がんばるの傾向を示せり(台湾日日新報 1917.2.25-4.27)

< 44 >はB 2主張を続ける意味の例であるが「立場にある」ということばに現れる通り、「場所」の比喩が「主張」に用いられていることがわかる。また、< 45 >はA 2の例だが、「百十度もする機械室の前」に居続けることが「努力」ととらえられており、Cの用法との連続性を感じさせる。

< 44 >しかしして内務省としては各府県二名や三名の事務官を設置しても到底現在の郡役所事務を整備することは全く不可能であるゆえ、右予算の削減に対しては最後まで頑張らざるを得ない立場にあるとのことである(大阪朝日新聞 1925.11.3)

< 45 >末次提督はこの苦しい潜水艦に乗り込むや直に作業服に着替え百十度もする機械室の前でそれから四箇月、五箇月と自ら頑張つたのです、その努力—その真剣味こそ今日「末次の潜水艦か潜水艦の末次か」といわれるようになったもので、これこそ日本の潜水艦をして、完璧に近いその性能を発揮するに至らせたものでしょう(大阪時事新報 1934.10.19-1934.10.30)

## (5) 意味用法の推移

以上述べてきたような分類を行った結果を表1に示す。現在の状況との比較のために、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所と文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」プロジェクトによる「現代日本語書き言葉均衡コーパス」サンプル版を利用し、2001年から2005年の新聞のデータ(1,473件、約140万語)を検索した結果を並べて挙げた。

表1 「新聞記事文庫」用例数 (百分率%)

	A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	計
1912 -1919	1 (0,8)	16 (14)	8 (7)	51 (44,7)	34 (29,8)	2 (1,7)	2 (1,7)	0 (0)	114
1920 -1924	0 (0)	40 (16,1)	24 (9,7)	104 (41,9)	72 (29)	0 (0)	8 (3,2)	0 (0)	248
1925 -1929	1 (0,4)	39 (17,4)	17 (7,6)	67 (30,0)	94 (42,1)	1 (0,4)	4 (1,7)	0 (0)	223
1930 -1934	1 (0,2)	93 (26,9)	38 (11,3)	106 (31,7)	173 (51,8)	9 (2,7)	26 (7,8)	6 (1,8)	345
1935 -1939	0 (0)	75 (24,9)	64 (21,2)	36 (11,9)	67 (22,2)	8 (2,6)	42 (13,9)	9 (2,9)	301
1940 -1945	0 (0)	20 (16,4)	24 (19,7)	6 (4,5)	12 (9,8)	5 (4,1)	31 (25,4)	24 (19,7)	122

現代日本語書き言葉均衡コーパス「少納言」用例数 (百分率%)

	A 1	A 2	A 3	B 1	B 2	B 3	C 1	C 2	計
2001 -2005	0	4 (3,0)	3 (2,3)	0	0	0	52 (39,1)	74 (55,6)	133

A 1 の例は、対象範囲を通してきわめて少ない。先述のとおり見張ることは A 2 の一所に動かずにいることと行動上の近接性が高く、使用意識としては区別がないものとも考えられる。A 2 の例は漸増する傾向があり 1930～1939 にかけて数値が高い。B 1、B 2 の例は減少傾向にあり、1935 以降激減している。これと反対の傾向を示すのが、A 3 および C 1、C 2 の各用法である。新村 (1944) の記述に比していえば、資料の特性上口頭語より変化の出現が遅れるため、実際の普及はもっと早い時期であろう。

自分の立場や主張を通す意の A や B の用法の感情的・評価的意味は状況によりマイナスにもプラスにもなる。< 46 > のように、「頑張る」ことが何かの障害・妨害となるような文脈においてはマイナスの価値を呈し、< 47 > のように「頑張る」ことが文脈において望ましい事態に結びつく場合はプラスの価値を呈する。目標 (基本的に望ましい事態) に向けて力を尽くす意を示す C 用法の価値はプラスであり、C の使用が増えるにつれて「頑張る」ということばの価値感情的・評価的意味も向上したといえよう。

< 46 > 東大には例の松波仁一郎博士が「商法にかけては日本広しといえどもワーガ輩の右に…」と<sup>ぐわんぼ</sup>頑張っていて弟子の田中助教授にも商法講座を分講しようとしなから田中君も椅子のない処へは帰れない、ために留学が延び延びて五六、年におよんだ (大阪毎日新聞 1931.5.11-1931.7.28)

< 47 > 満洲における日本の存在が、ひとり日本の存立のためのみでなく、東亜全局の平和保持のための絶対条件であることを信ずる限り、日本はあくまで満洲に<sup>ぐわんぼ</sup>頑張らねばならぬ。(報知

新聞 1921.11.5-11.11)

新村(1944)は、一般に普及するより早い時期の「頑張る」が学生たちの中で試験や運動競技に際して用いられた学生語であったと推察するが、1930年代から一般に広まったのもスポーツ競技の関与が大きいと考えられる。朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱの見出し語検索では、C2の早い例として相撲に関する記事<48>がある。

<48>運は天に任せてと雄々しい常ノ花 新館の初土俵ダウンと頑張るぞと 師匠の像の前に  
大胡坐(朝日新聞 1920.1.3)

見出し語検索の結果も、新聞記事文庫とほぼ同じ傾向で、1930年代まではA、Bの用法が多くを占めるが、30年代以降Cの例が増加する。スポーツに関する記事に例が多いが、とりわけ1936年のベルリンオリンピック前後で関連記事における見出しの例が目立つ。ベルリンオリンピックでは競泳女子平泳ぎ200メートル種目決勝の放送で、実況担当のアナウンサーが「前畑ガンバレ!」を連呼したことがよく知られている。スポーツの場を介して、学生語から一般へ広まるにあたって、1922年に開始されたラジオ放送も関与したのではないだろうか。

1940年代になると、戦争に関する記事の例、戦中の節約生活に関する記事の例が多く、困難に耐える意味合いが感じられる。

<49>心緩むな、頑張れ銃後 戦う兵隊さんがこんなに貯蓄(朝日新聞 1942.8.13)

<50>ガス 玄米も割当量で、工夫で頑張れ炊き過ぎるな(朝日新聞 1943.1.15)

<51>“芋飯”で頑張ろう この秋から差引配給(朝日新聞 1943.7.7)

現在においても「頑張る」ということばはスポーツや学業、修練に関してよく用いられ、また、日常のなにげない励ましの言葉である一方、大きな災害などが起こったときには合言葉やスローガンとして、象徴的な言葉として取り上げられることがしばしばである。<sup>(注6)</sup>

70年前に新村(1944)に指摘されたとおり、その用法や感情的・評価的意味が社会の雰囲気と関わる言葉であり続けているといえよう。

## (6) 終わりに

本稿では1920年代から1940年代の用例に基づいて「頑張る」という言葉の意味用法間の関連および使用状況の推移を考察し、以下Ⅰ～Ⅲの結論を得た。

- Ⅰ 明治期以降に使用が確認される「頑張る」は、その意味用法間の連続性や推移を観察すると、江戸時代の文献にみられる「がんばる（眼張る）」「我に張る」という両語句につながりを持つと考えられる。
- Ⅱ 現在最も多く使用される「目標に向けて力を尽くす」意味の用法は、1930年代に使用が増加し、意志・意向および働きかけの用法は1930年代半ばから急増する。
- Ⅲ Ⅱの変化に伴って「頑張る」の感情的・評価的意味はプラスイメージの傾向を強めている。この変化は社会状況や時代背景と関連をもつ。

今回の調査は、資料の範囲や時期が限定されたものであり、不明な点や推測を越えない面も多い。前後する時期の調査、範囲を広げた調査により、さらに明らかにしていくべきであろう。また、「我慢」「頑固」「こだわる」「あきらめる」など「頑張る」の周辺にあり、感情的・評価的意味が揺れる語との比較も今後に期したい。

### 注

(注1) 例えば、大村はま(1999)に以下の記述がある。

「…一昔前までは、「がんばる」ということばが、こんな風によくない意味に使われていました。「我を張る」からきた言葉といわれていますが、もしそうでなくても使われている意味は「我を張る」でした。〈略〉この「がんばる」ことのよい面の意味が、だんだん大きくなって、前の意味の影がうすくなりました。昭和の激動のなかを、たいそう速いスピードで揺れながら通り抜けてきたと思います。そして、ほめことば、励ましのことば、そういう積極的なよい言葉になってしまいました。どんな困難、障害があってもくじけず、力いっぱい努力する、目的としたことをやり通す、という意味になったのです。…」

(注2) 読売新聞新日本語取材班(2004)『乱れているか? テレビの言葉』では、国立国語研究所によるデータベース『太陽コーパス』で「頑張(る)」の検索を行った結果、1901年まで例がなく1909年3件、1917年8件、1925年13件と増加が観察され、新村の推測を裏付けると述べている。

(注3) (注2) 小泉保編『日本語基本動詞用法辞典』(大修館書店、1989)には次のように記述されている。(用例省略)

がんばる 【意味・文型】

(1) 困難にも負けないで非常に努力する。

[人] {が/は} ([活動・事] {に・で} がんばる

[人] {が/は} ☒とがんばる。

(2) ある場所から動かないでいる。

[人・生き物] {が/は} [所] {に/で} がんばる

(3) 譲らず頑固に自説を言い続ける。

[人] {が/は} ☒とがんばる

(注4) 「新聞記事文庫」からの引用については、常用漢字の字体、現代仮名遣いに置き換えを施した記事全文テキストを使用しているが、下線部のみ画像データにより仮名遣いおよびルビを復元した。

(注5) 用法の推移の傾向は、「頑張る」と共起する語句にも見ることができる。表2は、「頑張る」に複合する後部要素および副詞的修飾部分を調べたものである。

「頑張る」と共起する特徴的な語

		-1920	1921-1925	1926-1930	1931-1935	1936-1940	1941-	2001-2005
複合動詞	—とおす	3	2	11	18	3	1	
	—つづける		2	1	5	6	1	
	—ぬく				4			
	—だす		2	1	3			
	—でる		1					
	—きる							
時間	最後まで		2	1	17	9	2	
	あくまで		2	4	17	5	4	
	(いつ・どこ)までも		1	1	1	2		
	時+まで		1	1	2		1	
	状況+まで				1		2	
	なお		1		3	1		
	依然(として)	1			5			
	時間・期間		1		2			2
	時+から							2
時+も				1	3	2	4	
時+を				1	3		1	
状態	「強硬に」系	2	4	3	6	7	1	
	極力			1	1			
	えらく				1			
	しっかり				1	1		
	精一杯							4
	一生懸命							1
無理に								
程度大	大いに		1		5	4	4	
	ウンと	1			2		1	
	よく					1		4
	非常に				1		1	
程度増	益々		1					
	もっと					2		1
	さらに						1	
目的	—よう(に)							18
	—ために(に)						1	2
	向かって						1	4
	めざす							8
	目標							3

(注6) 岡田(2011)では、東日本大震災以後、従来の「頑張る物語」が機能しなくなったと述べ、それに代わる新たな物語の模索について「頑張る」をキーワードとして論じている。

<本文中に記した以外の用例出典>

日本古典文学大系『風来山人集』岩波書店、1961  
『明治開花期文学集(一)』筑摩書房、1966  
叢書江戸文庫『近松半二浄瑠璃集』1996  
新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 下』岩波書店、1993  
新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』小学館、1998  
『漱石全集』岩波書店、1993

<引用・参考文献>

新村出(1944)「頑張考」(『新村出全集 第四巻』筑摩書房、1971)  
穎原退蔵(1947)『江戸時代語の研究』白井書房  
吉田金彦(1990)『ことばのカルテ』創拓社  
大村はま(1999)『心のパン屋さん』筑摩書房  
松岡陽子マックレイン『英語・日本語コトバくらべ』中公文庫  
橋本五郎監修・読売新聞新日本語取材班(2004)『乱れているか?テレビの言葉』中公新書  
川岸克己(2011)「頑張る」における構造と変化(『安田女子大学紀要』39号)  
岡田暁生(2011)「芸術はなおも「頑張る物語」を語り得るか」(『アルテス』vol.1特集【3.11と音楽】、アルテスパブリッシング)